

GIS と高精度センシング技術の活用による オマーン青銅器時代遺跡群の空間構造の研究

近藤 康久

東京大学 総合研究博物館／空間情報科学研究センター
連絡先: <yaskondo@csis.u-tokyo.ac.jp>

(1) **背景:** アラブ首長国連邦とオマーン国の位置するオマーン半島の一带は、青銅器時代に当たる紀元前 3 千年紀にメソポタミアとインダス平原で都市文明が開くと、両地域を結ぶ陸海交通網の結節点の役割を果たした(図 1). この時期、半島全土に無数の石積墳(図 2 左)と石積塔(図 2 右)が造営されたが、その担い手が海洋交易民なのか、在地農耕民なのか、はたまた沙漠の遊牧民なのかという問題については決着をみていない。

(2) **目的・方法:** そこで、内陸部に所在する世界遺産バート遺跡群を対象に、GIS を基盤として、ALOS 「だいち」衛星によるリモートセンシング・地上写真測量・GPS 踏査を組み合わせることで多角的に遺跡の調査を行うことにより、遺跡群の空間構造を高精度で解明し、もって文化の担い手の実像を解明する。

(3) **結果:** 調査は現在も継続中であるが、長竿の先に取り付けたデジタルカメラによる地上写真測量によって、頂部中央に井戸、外部に周壁をもつことなど石積塔の構造が判明しつつある。また、GPS マッピングにより、石積墳は丘陵の稜線上、石積塔はワディ(潤れ川)沿いの沖積低地に立地するという空間的対比が明らかになった(図 3)。

(4) **意義:** 研究のさらなる進展により、給水施設/ランドマークとしての石積塔と、灌漑施設(ファラージュ)、ナツメヤシ農園、石積墳の墓域からなる先史時代オアシスの空間・景観構造が明らかになると期待される。そこから、コムギ栽培と遺丘型定住村落を基盤とする「肥沃な三日月地帯(タウルス・ザグロス山脈南麓)」型とは異なる、当地域独自のオアシス環境適応モデルを構想・提案していきたい。

(5) **参考文献:** 近藤康久(2009)紀元前 3 千年紀後半のオマーン半島における拠点間往来. 農耕と都市の発生, 西秋良宏・木内智康編, 同成社, pp.227-240; 近藤康久(2010)オマーン・バート遺跡群. 考古学研究 57/2: 118-120.



図 1: オマーン半島とバート遺跡群の位置



図 2: 青銅器時代の石積墳(左)と石積塔(右)

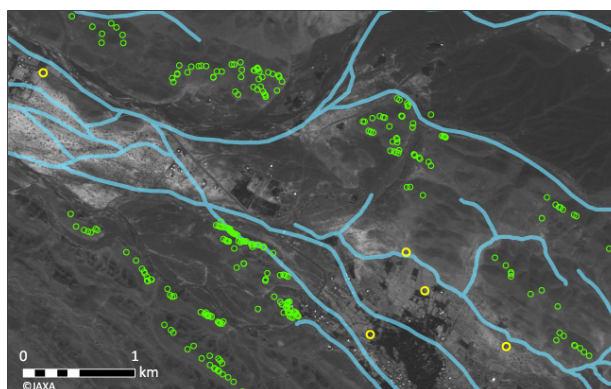


図 3: バート遺跡群における石積墳(緑色)と石積塔(黄色)の配置, および旧河道(水色). 宇野隆夫氏, E. Fouache 氏らの調査成果を含む。背景は ALOS PRISM.